

# 「響きと怒り」について

—— ある時代の終焉 ——

本 間 武 俊

は じ め に

ウィリアム・フォークナーは、アメリカ南部のミシシッピ州北部にあるオックスフォードという小さな田舎町で、彼の殆ど全生涯を送った。そしてこの町をモデルにして、彼の殆どの作品の背景になっているジェファソンという架空の町を創り上げ、自らの南部人としての生活体験を十分に駆使して、この架空の町の年代記とも言ふべきヨクナパトォファ・サガを生涯かけて書き続けたのであった。

フォークナーが作家として、初めて自分独自の世界と描くべき対象とを発見したのは1929年に出版された第三番目の小談「サートリス」を執筆していたさなか、あるいはこれを書き終えた頃であろうとされている。事実、あるインタビューの席上、彼は次の様に言っている。

「サートリス」によって私は、私の生まれ故郷であるこの郵便切手のように狭い地域が書くに値するものであり、それは、私が一生かけても書き尽くせないであろうということを初めて発見した。そして現実を普遍的な世界へと昇華することによって、私は自分のあらゆる才能を最大限に用いる完全な自由を保持していることを知った。<sup>1)</sup>

フォークナーが書こうとしたことは、南部という郷土の思い出に根ざしたものであると言える。フォークナーの南部に対する態度は、「アブサロム、アブサロムノ」(1936)におけるクエンティン・コンプソンとカナダ人の学友との対話の中に最も強烈に響いている。

「どうして君は南部を憎むんだ？」

「ぼくは憎んでやしないよ」クエンティンは急いで、すぐに打消した。「ぼくは憎みやしないよ」と彼は言った。ボクハ憎ミヤシナイと彼は思った。冷たい空気の中で、鉄のようなニュー・イングランドの間の中であえぎながら、ソウジャナイ、ソウジャナイダノ憎ンジャナイ、憎ンジャイナインダノ<sup>2)</sup>

このクエンティンの——つまりフォークナーの——南部に対する態度には、

愛と憎しみとが入り混じっている。このような、南部に対する愛憎の入り混じった態度こそ、フォークナーに彼の最大の傑作と呼ばれる「響きと怒り」The Sound and the Fury, 1929. を書かせたものであり、その他の比較的初期にあらわれた「我死の床にありし時」As I Lay Dying, 1930. 「八月の光」Light in August, 1932 「アブサロム、アブサロム！」Absalom, Absalom! 1936 を書かせたものであると考えられる。

### 「響きと怒り」

この小説は1929年10月に出版された。この作品の主題は南北戦争以前からミシシッピ州ジェファソンで栄えてきたコンブソン家の崩壊の歴史を描いたものであり、その点においては同年1月に出版された「サートリス」と同じである。しかし相前後して書かれたとはいえ、これら二つの作品の間には、表現形式の上から見ると、これらが前後して書かれたとは到底思われなほどに著しい違いがある。「響きと怒り」は日付けを付された四つの章から成り、しかもその配列の順序といえ、第一章1928年4月7日、第二章1910年6月2日、第三章1928年4月6日、第四章1928年4月8日となっているのだ。各々の章では、それぞれ一日の出来事とそれに触発されて主人公の意識に目覚めさせられた過去の回想とが、それぞれの主人公の意識の流れを通して語られている。

第一章では、コンブソン家の三男で33才になる白痴のベンジーが黒人のお守り役の少年に守られて、屋敷の内と外を当ても無くさまよう姿と、現実の情景が彼の脳裡に呼び覚ます過去約30年にわたる切れ切れの記憶とが描かれている。ここでは読者は完全に白痴の意識の流れの中に置かれることになる。ベンジーには現在と過去とを区別する能力が無く、今この瞬間にあることも、過去にあったことも彼の脳裡では同時に存在している。ベンジーの意識を去来する雑多な断片的記憶の内容がいく分明らかになるのは、第二章のクエンティン・コンブソンの意識においてである。第二章では第一章から18年も遡った1910年6月2日のことが描かれている。この日はコンブソン家の長男クエンティンのハーヴァード大学における最後の日であり、この地上における最後の日でもある。この章において、自殺を決意したクエンティンが、あてもなくボストンの郊外を徘徊し、その夜寮に戻って荷物の始末をして川に身を投げるために部屋を出て行くまでの彼の一日の行動と錯綜した意識を刻明に辿ることになる。コンブソン家の没落がはっきりと意識されるのは、このクエンティンの意識の内部においてである。第三章は次男のジェイソンの意識を通して描かれている。彼は白痴でもなく、ノイローゼにかかった自殺寸前の青年でもない。しかし物欲的で卑しく下品な男であり、身を以ってコンブソン家の没落の最終的な段階を示していると言える男である。彼の日課を辿ることによって、コンブソン家

の没落の傷しい有様がひとときわあらわにされるのである。

これらの三章では「意識の流れ」の手法が徹底的に用いられ、主人公の行動とともにその意識は目まぐるしく変化し、交錯する。しかし最後の第四章では一変して、普通の描写による客観的な多元描写の手法が用いられ、コンブソン家の1928年4月8日の有様とこの家に仕えている黒人の家族とが、外側から描写されている。それ故、一章から三章にわたって断片的に語られ、しかも三人の兄弟のそれぞれの主観に応じて、それぞれ異なった潤色を施されてきたコンブソン家の没落は、ここで初めて客観的に総合されて描き出されている。

しかしこの小説のプロットやテーマだけを切り離して語るとは、殆ど意味のないことである。まず、第一章から第三章までの視点となっている三人の兄弟の意識の——過去の体験の回想、裏切られた夢、妄想などの——中核にあるのが、この家の一人娘キャンディス・コンブソンであることに注意しなければならない。彼女は読者の前に直接に姿を表わすことはない。それは丁度「アブサロム、アブサロム！」におけるトーマス・サトベン大佐の姿が彼を記憶している人々の物語の中に立ち現われるように、彼女もまた、三人の兄弟達の記憶の埒場の中にその臍気な姿を見せるのだ。そればかりでなく彼女の姿は、「アブサロム」のサトベン大佐の姿と同様に、この小説の中で重要な役割を果たしている。三人の兄弟それぞれにとって彼女のイメージは非常に象徴的である。また異様な構成を持っているこの小説の内的秩序が、このキャンディスのイメージによって保たれているようにも思われるのだ。

柵をとおして、巻きついた花のすき間から、彼らが打っているのが見えた。彼らは旗のある所へ向って来た。そして私は柵にそって歩いた。ラスターは花の咲いている木のそばの草の中をさがしていた。彼らは旗を抜いて、また打っていた。それから旗をもどして、テーブルの所に来た。一人が打って、もう一人も打った。それから彼等は歩いていった。私も柵にそって歩いた。ラスターが花の咲いた木の所からやってきた。私たちは柵にそってすすんだ。彼らは止まり、私たちも止まり、ラスターが草の中をさがしている間に、私は柵をとうして見ていた。

「おーい、キャディ」彼は打った。彼らは牧場を横切って向こうへ行った。私は柵にしがみつき、彼らが遠ざかるのを見ていた。「なあ、いいだか」ラスターが言った。「お前はそんなにうなってばかりいてよ、いい子でなかっただか、三十三にもなったのによ……よさねえだか、そんなにぶうぶうなるのは……<sup>3)</sup>

これは第一章の冒頭の一節である。ベンジーは、この日で三十三才になる先天性の白痴である。この日彼は、お守り役の黒人少年ラスターにつき添われて

かってコンブソン家の所有地であったが今は人手に渡ってゴルフ場となっている牧場の柵のまわりを、うろつき廻っているのだ。そしてこの牧場こそ、彼が幼い頃から愛してきたものの一つであった。しかしこの牧場にもまして彼が今なお愛し続け、そしてその不在の悲しみを味あわされているのは、姉キャンデイスの——幼い頃にキャディと呼ばれていた人の——姿である。今の一節を注意して読んでみれば分かることだが、ベンジーがうめき声をあげたのは（ラスターの科白で示されている）、ゴルファーが叫んだ「キャディ」(caddie)という音声で、彼の脳裡に姉のキャディ(Caddy)の姿を呼び覚まし、同時に彼女の不在を彼に感知させたからなのだ。

私たちはこわれた所へきた、そしてそこをくぐり抜けた。「ちょっと待て」ラスターが言った。「お前は、またこの釘に引っ掛かっただな。何でこの釘に引っ掛からないで、くぐれねえだよ、お前は」キャディが、ヒッカカッタ釘カラ私ヲハズシテクレタ、ソシテ私タチハ、這ッテクグッタ。モーリー叔父サンガ誰ニモ見ラレナイヨウニシナッテ言ッタノヨ、ダカラ背ヲカガメナキャタメヨ、トキャディガ言ッタ。<sup>4)</sup>

この一節は冒頭の場面の直後に柵をくぐり抜けようとした時に、ベンジーが釘に引っかかってしまい、それが突然、幼い頃の同じ体験を彼の意識に喚起させたのだ。片仮名の部分がそれである。この場合のようにベンジーの意識の中では、過去と現在とが分かち難く存在している。そこで、眼前の情景であろうとも彼にとってはいわば影にすぎず、逆にこの今の情景が呼び覚ました過去のある情景の方がベンジーにとっては、きわめて切実なリアリティーを持つ場合も少なくない。ちなみに、今の引用から二頁に渡って、過去の記憶が彼の脳裡を占領してしまうことになる。この章の全体にわたって、読者は現在の一つの事実から昔の記憶へ、あるいはその昔の記憶からさらに遡った昔の記憶へと、何の予告もなく数年にも及ぶ時間のギャップを飛び越えて、何回となく闇雲に引き回されることになる。ベンジーにとって現在は影のような存在であるかも知れないが、この影は必ず過去のある情景を彼の意識の中に呼び覚ますのである。実にこの点に作者の周到な配慮が読み取れるのである。さきの二つの例で示したように、ベンジーの脳裡を去来する過去の切れ切れな情景は、一見きわめて雑然として、無意味なものに思われるかも知れない。にもかかわらず、それらは過去のいくつかの重要な経験に収束している。そして、これらの過去の重要な経験とそれを取りまく記憶の切れ端しが、コンブソン家のおよそ30年にわたる没落の歴史を醜氣に伝えるのである。醜氣にという表現は適切ではない。何故ならば彼は、白痴でありながらも、事象そのものを彼のあらゆる感覚を動員して把握しているからであり、唯一つ彼に出来ないのは、その事象に名

前を付けそれを他者に伝達することである。

ベンジーの記憶がしばしば回帰する過去の経験とは、幼い頃に姉のキャディや二人の兄弟と小川で水遊びをした時のことであり、同じその日の夜に行なわれていた祖母の葬式をキャディが木の上からのぞき見た時のことであり、彼が今のベンジャミンという名に改名された日に見聞きしたことであり、中でも最も傷しいのはキャディが純潔を失なった日のことであり、そして彼女の結婚式のことである。ベンジーの眼前の光景は、これらの過去の情景を必ず彼の意識に喚起するのである。さらにこれらの過去の情景は次章のクエンティンの意識の中でも深い意味を持つものとして、よび覚まされることになる。

「さあ、これでお前も気がすむんだろう」とクエンティンが言った。

「これで、僕もお前も二人とも鞭でぶたれることになったんだから」

「あたしは平気よ」とキャディが言った。

「あたしは逃げちゃうもの」

「お前ならそうするだろうさ」とクエンティンが言った。

「あたしは逃げて行って、帰ってこないわ」とキャディが言った。私は泣きだした。キャディがふり向いて「しっ」と言ったので、私はだまった。<sup>5)</sup>

これが小川の場面の回想の一部である。キャディとクエンティンの口論が始まる前に、クエンティンの制止を聞かずに服を脱いだキャディが怒ったクエンティンに川に突き落され、二人で水のかけ合いをした。そのため今二人はズブぬれになっているのだ。クエンティンとキャディの口論は二人の将来を暗示するものを含んでいる。まずキャディは、南部貴族と呼ばれた旧家の娘であるにもかかわらず、成長するにつれてふしだらになり、よそ者の子を宿したままある銀行家と結婚し、子供が生まれると離婚される。そしてそれ以後キャディの名を口に出すことが、コンプソン家では禁じられてしまうのだ。勿論、このような彼女の一生はこの小説を終りまで読まないことには、明らかにならないのであるが、「あたしは逃げて行って、帰ってこないわ」と口走る幻いキャディの中に、後の姿を読み取ることができるだろう。クエンティンは、キャディのふしだらに非常に心を痛めることになる。彼にとって妹の処女性は、コンプソン家の名誉と誇りが託されているものとなる。そして彼女が純潔を失なったことを知ると彼は、彼女の不品行をさらに重い罪を二人で犯すことによって抹殺しようと考え、自分が妹とインセストを犯したと妄想するようになる。この妄想はインセストという罪を犯すことによって二人を地獄に投げこみ、地獄の永遠に燃える炎にかこまれて汚れやすい妹をいつまでも守りたいという、かなわぬ欲求に根ざすものである。以上のことはすべて第二章で明らかになるのであるが、「これで僕もお前も二人とも鞭でぶたれることになったんだから」と言

う九才のクエンティンとインセストの妄想にかられているハーヴァード大学における彼とは、その意識の深層においては殆ど変わっていないのである。

水遊びをした日の夜には、彼らの祖母の葬式が屋敷の中で行なわれていた。しかしこのことは子供達には知らされていなかった。だが長男のクエンティンを除くと、ベンジーだけが死の気配を感じ取ったのであった。

それから私たちは食べるのをやめ、おたがいを見ながら静かにしていた。すると私たちには、またその音が聞こえてきた。私は泣きはじめた。……「あれはお母さんだ」とクエンティンが言った。スプーンが口のそばへきたので私は食べ、また私は泣きだした。<sup>6)</sup>

白痴が過去の情景をこれほど正確に再現することができるかどうか、という点に関しては異論があるだろう。しかしこの白痴が過去を思い起すことと、うめき声を発すことの間には何らかの理由がありそうだ。これまでの四つほどの引用において、彼がうめき声あるいはわめき声を発したのは、まず第一にゴルフ場の柵の所であった。この場合はゴルファーの「キャディ」という声を聞いて、その音が姉の愛称の Caddy の発音と同一であることから、彼女のことを思い出したためであった。次は小川の場面でキャディが「あたしは逃げていて、帰ってこないわ」と言ったのを聞いて泣きだしたのであった。そして三番目の場合は祖母の死を感じ取ったからであった。

「あたしを押してよ、ヴァーシュ」とキャディが言った。

「そんじゃ、押すだよ」とヴァーシュが言った。「ぶたれんのはお前さんでおらでねえだから」彼は言って、キャディを木の最初の枝まで押し上げた。私たちは彼女の泥だらけのズロースの尻を見ていた。それから彼女が見えなくなり、木が、がさごそとゆれるのが聞えた。

「ジェイソンの旦那が、もしその木を折ったら 鞭でひっぱたくって言っただよ」とヴァーシュが言った。

「ぼくは、お姉ちゃんのこと言いつけてやるから」とジェイソンが言った。木のゆれがやんだ。私たちは静かになった枝を見上げた。

「何が見えるだね」とフロニーが小さな声で聞いた。

私ニハ ミンナガ見エタ。ト私ニ キャディガ、髪ニ花ヲツケ、光ル風ノヨウナナガイヴェールヲカブッテイル キャディガ見エタ。キャディ、キャディ

「しっ」とティー・ビーが言った。「向こうの人たちに聞こえるだよ。早くおりるだ」彼が私を引っぱった。キャディ、私は壁にしがついた。キャディ。<sup>7)</sup>

この長い引用もベンジーの記憶の流れの一節であるが、この中では時間的に

遠くかけ離れた二つの情景が、のぞき見という行為の類似性によって連合されている。まず片仮名の部分に至る前半までは、客間で行なわれている葬式をキャディが庭の木の上からのぞき見た時の情景であり、その後半部はキャディの結婚式を窓からベンジーがのぞいた時の情景である。そしてここでもキャディの花嫁姿がベンジーに泣き声をあげさせたのだ。

するとキャディが私に腕をまわし、彼女は光ったヴェールをきていて、私はもはや木の匂いを嗅ぐことができず、私は泣きだした。

ベンジー ト、キャディガ イック。ベンジー。彼女ハ モウ一度腕ヲ私ノマワリニマワシタガ、私ハ逃グタ。「どうしたの、ベンジー」とキャディが言った。彼女は帽子をぬいでもう一度近づいてきたが、私は逃げた。「ベンジー」と彼女が言った。「どうしたのよ、ベンジー。キャディが何をしたっていうの」

「こいつは、お姉ちゃんのそのしゃらしゃらした服がきらいなんだよ」とジェysonが言った。「お姉ちゃんは自分が大人になったと思ってるんだろう、そうだろう。ほかのだれよりも偉くなったと思ってるんだろう。お姉ちゃんの、おしゃれ。」……「十四になったもんで、お姉ちゃんは自分が大人になったと思ってるんだ、そうだろう」とジェysonが言った。<sup>8)</sup>

キャディの花嫁姿は、はでな服を着るようになった少女時代のキャディの姿を彼に連想させる。しかもベンジーは、キャディの二種類の姿を拒否しているのだ。花嫁のキャディは、木の匂いがしないという嗅覚による判定により拒否される。少女のキャディが、そのはでな服を脱ぎ入浴をすませると、彼女に木の匂いがよみがえるのである。ベンジーが安心して全面的にキャディを受け入れることができるのは、彼女が木の匂いを漂わせている時だけなのだ。

「まったの、ベンジー」とキャディが言った。彼女は門を開けて入ってくると、かがみこんだ。キャディは木の葉のような匂いがした。……「あんたはキャディをお迎えにきてたのね」と彼女は私の手をこすりながら言った。「何だっていうの、何をキャディにお話したいの」キャディはまるで木のような、そしてあたしたち眠っているのよと、彼女が言うときみたいな匂いがした。

ナニヲ ソンナニ ウメクダ、ト ラスターガ言ッタ。<sup>9)</sup>

これは冒頭のゴルフ場の場面の直後にある一節で、彼とラスターが柵をくぐり抜けようとした時に彼の頭に浮んだ幼い頃のキャディの思い出である。ベンジーが寒い中をわざわざ門の所まで出て来ていたのは、この木の香のするキャディを待ちかねていたからであった。木の匂いのするキャディは、ベンジーが

心底から愛している、かけがえのない人であるらしい。

……するとキャディは膝まずいて両の腕を私にまわし、冷たい光った頬を私の頬にすりよせた。彼女は木のような匂いがした……

ソナフウニ ブウブウ、ウメイタリ、涎ヲタラシタリスルノ、ナンデ  
ヤメラレネエダ、ト ラスターガ言ッタ。<sup>10)</sup>

これらの二つの引用に見られるように、幼いキャディの姿がベンジーの記憶の中に現われる時、彼は必ず獣めいたわめき声を発するのであるが、彼のそのような記憶となきわめく行為の間の因果関係を説明するものは、一切読者には与えられていないのである。従って読者はこの白痴の脳裡を去来するあらゆる情景の中に、自らを埋没させ、白痴の意識と一体化する以外ないのである。そしてこの様にして白痴の意識を終りまで辿り、続けて第二、第三章を読み終えた時に、この文字通り響きと怒りに満ちた白痴の物語の中に、一つの現実が出現するからであり、空に無意味に響く白痴のわめき声の中から、いくつかの異なる音色が聞き分けられるようになる。

汚れない処女のキャディが、ベンジーにとってははいとおしい、かけがえのない人であろうことは推測できる。汚れないキャディが彼の保護者であり、彼をいつくしみ愛してくれた人であったことは、これまでの引用で明らかにされた。キャディは、白痴にもそれなりの世界があるとすれば、ベンジーの世界の秩序と平安とを支えていた人であった。第二章でクエンティンが一家の名誉と誇りの象徴として、キャディの処女性に意味を与えているのと比較すると、ベンジーにはその様な意味付けの能力が欠けているが故に、かえって一層キャディのイメージは豊かに意味深いものになっている。しかしベンジーの記憶に現われるキャディの像は固定的なものではない。彼は、いっても処女のキャディを思い出すことができるが、また様々に異なったキャディをも想起するのである。だから白痴と一体化して彼の意識を辿ってきた読者の内部には、時間とともに刻々と移り変ってゆくキャディ、ベンジーから遠ざかってゆくキャディ像が形成されることになる。このことは読者に、何かある掛け替えのないものが失なわれゆくという傷しい体験をベンジーとともに共有させるのである。キャディが「木の匂い」を失ない、あまつさえよそ者の子を宿したまま結婚し、彼のもとを離れるということは、ベンジーのよき世界の完全な破綻を意味するであろう。ベンジーのわめきは、キャディの不在を悼むものであり、同時にキャディのイメージの彼方にある或るものの喪失を悼むものでもあるのだ。ベンジーのわめきのこの重層的な意味は、クエンティンとジェイソンの意識を通して次第に明らかにされることになる。

これまではベンジーと彼のキャディの思い出との関係が持つ意味について語



ってきた。しかし彼の意識に浮ぶ過去はまだ数多くあり、また彼の意識のスクリーンに投影される眼前の情景にも意味深いものが多い。勿論それらも断片的なものであり、彼の感覚のみが捉えたものであり、いわば事象そのものとして描かれている。例えばベンジーのうつろな耳に響く「コイツハ、マダコノ牧場ヲ 自分チノモノダト思ッテイルダヨ」と言うラスターの言葉や、「なき虫野郎ト、ラスターガ言ッタ。オ前ハ 恥ズカシクネエダカ。私タチは、瓶ノ中ヲ 通りヌケタ。小屋ハ ミンナ閉ケッパナシニナッテイタ。オ前ニヤ乗リタクテモ、モウ斑ノ小馬ハ一頭モ、イネエダゾ、ト ラスターガ言ッタ。」のように彼の焦点の定まらぬ眼に映つる光景は、喪失と荒廃という痛々しい印象を読む人々に与えずにはおかない。

そしてこの一家の没落に客観的な照明を与えているのは、この家に仕えている黒人達である。

私たちには、昔みたいな広々した場所もうねえですだ。だからベンジーがなきはじめたら、隣近所に聞えるだで、庭から家ん中さつれてこなきゃなんねえですだ。<sup>11)</sup>

これはコンブソン夫人の小言に対する黒人の召使い女ディルシーの答えであるが、この中でコンブソン家の経済的な没落が明らかにされている。ベンジーにしる他の二人の兄弟にしる、彼等の視点の特殊性が事実や回想を歪めて伝えているのだが、それに対してこのディルシーをはじめとする黒人の視点は、釣合いの取れた客観的な見方を与える。

コンブソン家の経済的没落と精神的退廃を表わす数多くのエピソードは、第二章のクエンティンの意識の中にも現われ、その中のいくつかはベンジーも体験した出来事に関するものである。それらはベンジーの場合には彼の感覚のみによって事象それ自体として捉えられてきたのに対して、クエンティンの場合には、インセストと時間についての強迫観念によって異様な潤色を施されているとはいえ、白痴ではないので、彼の意識に現われる一家の歴史のエピソードはより明確な輪郭を持っている。そのため、彼のハーヴェード大学の学資とキャディの結婚の費用を捻出するために、ベンジーがこよなく愛していた牧場を売り払ったことや、キャディの不品行とよそ者との情事など、あるいはアルコールの酔いに逃避してしまった父親コンブソン氏の無気力な姿などが、初めてこの章で明らかにされる。そしてこれらはクエンティンにとって、記憶し続けるには耐えられない体験であるのだ。彼に家の没落を否認無しに意識させるのは、これらの体験であり、それらはまた彼の神経症の原因でもあるらしいのだ。

時討を「あらゆる希望と欲望の墳墓」と見做す点においては、クエンティン

とコンブソン氏とは一致している。

その時計はもと祖父のもので、それを僕にくれた時、父はこう言った。クエンティン、お前にすべての希望と欲望を埋める墓場をやろう。気の毒だが、おそらくお前はこれを使うことであらゆる人間体験が結局無意味であることを悟るようになるだろうが、そうなったところで、これが私や私の父親の要求を満たさなかったと同じように、お前個人の要求をも満たすことはできないだろう。私はなにも、お前が時間を忘れないためにこれやるんじゃない。むしろたまにはしばらく、時間を忘れるために、時間を征服しようとして一生を棒に振るようなことにならないようにと思って、これをやるんだ。だって、これまで時間と戦って勝ったためしはないんだからな、と父は言った。いやそんな戦いが戦われたことさえないんだ。そんな戦場は、ただ人間に自分の愚劣と絶望を教えるだけで、その戦いに勝つなんていうことは哲学者や馬鹿者の妄想にすぎないのだ。<sup>12)</sup>

ここには、現実打ちのめされた敗北者のシニシズムと自己弁護が読み取れる。この父と息子にとって、人間とはその人の過去の不幸の総和にすぎない。「いずれは不幸の方がくたびれるかも知れないと思われるかも知れない。だがその時こそ、時間がお前の不幸となるのだ。」<sup>13)</sup> 現在とはクエンティンにとって、あらゆる不幸と絶望の総和であり、彼自身は「敗北した人々の誓きわたる名前がこだまする伽藍」<sup>14)</sup> であり、大鋸屑が一杯につまった人形にすぎないのである。クエンティンが度々、「父は言った」という形でコンブソン氏の言葉を復唱するのは、彼ら親子が南部農業社会とその構成単位である家父長制に支えられていた家の崩壊によって、激しい衝撃をこうむっており、しかも崩壊の最終局面とも言うべき現在において為す術もなく、ひたすら無力感に浸っているという、体験の共通性に因づくのである。

だがクエンティンは、父親のシニカルな哲学談議をそのまま受け入れているわけではない。神経症による異常な想像力は、彼と妹キャディとの間にインセストが行なわれたという妄想を構築する。そして彼はこれを事実だとして父親に信じこませようとする。このグロテスクな妄想を生み出した原因を、単に、彼が妹の肉体ではなく彼女の処女性を愛していたからであり、さらにこの処女性に一家の名誉と誇りとを象徴させていたからだとして解釈を済ましてしまうわけにはいかない。<sup>15)</sup> 確かにそれは、守りとおしえなかったある価値を奮回しようとする絶望的な試みには違いない。しかしキャディの処女性が象徴している価値は単にコンブソン家の名誉などという単純なものではない。クエンティンが南部貴族と呼ばれる旧家の嫡子、彼の母親の言葉で言えば一家の誇と喜びをになう者であることを念頭に置く必要があるだろう。

コンブソン氏はアルコールに溺れることによって絶望から逃れることを試みそれによって命をちじめ、そして死によって絶望からの逃避を最終的に完結することができた。しかし、彼の息子は自殺以外に術はなかった。彼は父親のシニカルな哲学談議に安住することができなかった。何故ならばそれは、コンブソン家の没落を必然的運命的なものとして認めながらも、それはそれ以下でもそれ以上でもなく、単なる無意味な現象にすぎたいと断定する考え方であったからだ。ところがクエンティンにとっては家の没落とは同時に、家に集約されている南部の伝統の崩壊でもある。嫡子としての彼にとって、この事実は切実な意味を持っているはずだ。

彼が、ほの暗い記憶の中で絶えず繰り返すのは、「お父さん、僕はインセストを犯しました。それをしたのはドールトン・エイムズではなくて僕なのですと私は言った」という言葉であるが、これが事実ではない所に、クエンティンのコンブソン氏の無気力なシニシズムと没落という現実に対する絶望的抵抗の姿を読み取ることができるのである。「父は言った」と繰り返すクエンティンの言葉の背後には、「父が言った」ことを否定してしまいたいという衝動が秘められている。その衝動の最もグロテスクな表現こそ「お父さん、僕はインセストを犯しました」という一種の嘘であるが、よそ者に愛する妹の肉体を汚されるよりは自分が妹の肉体を所有したいという暗い欲望が皆無だったとは言いつてもいい。

また彼の妄想は、インセストによってそれまでの妹の不品行を一切無意味なものにし、そうすることによって妹の一切の不品行を抹殺してしまいたいというかなわぬ欲求の裏返し表現であると仮定することもできよう。<sup>16)</sup>それは一層忌しい罪を犯すことになり、そうすれば「ボクタチハ出カケテイッテ責苦ト恐怖ニ背イ炎ニカコマレナケレバナラナクナルダロウ」<sup>17)</sup>し、そうすればインセストの汚れを恐れて、彼ら二人以外はみんな地獄から逃げ出すことも、またありえるかも知れない。作者は「つけたし」の中でこのようなクエンティンの考えを、「彼自身がインセストを犯すことによって自らと妹を地獄に投げこみそこで彼は永遠に燃えさかる炎にかこまれて妹をいつまでも守り、いつまでもそのままの姿で保つことができるという考え」と説明している。<sup>18)</sup>ベンジーの回想のところでふれた小川の情景には、この解釈を支持するものがあるようだが、妹とインセストを犯しても、彼女を「このままの姿で保つ」とは一体どういう意味なのか。

ここで再びあのベンジーのわめき声が聞こえてくる。クエンティンもベンジーと同じようにキャディのイメージの崩壊を嘆いているのだ。そしてクエンティンにおけるキャディのイメージは人格的なものを遙かに越えて、南部の旧家の存在を支える価値の表象としてある。だから「妹をこのままの姿で保つ」と

ということ南部の旧家である自分の家を、そして南北戦争以前の南部農業社会の伝統を維持するということは、彼の場合には同義なのだ。

クエンティンの時間に対する特異な考えは崩壊を阻止したいという彼の希望と全く対立するものである。彼にとって時間とは、破壊力であり同時に満されずに埋もれてしまった数々の希望と欲望との総和である。それはマクベスの第五幕第五場におけるあの、

そうか、いっかは死ぬはずであった。こういう知らせを聞く時もあるだろうと思うていた——明日が、その明日が、そのまた明日が一日一日とゆっくり過ぎて、やがては時の最後に行きつくのだ。昨日という日はすべて、馬鹿者どもが塵にまみれた死にいたる道を照らしてきた。消えろ、消えろ、はかない灯の光。人生は歩く影法師、あわれな役者だ。束の間の舞台の上で身振りよろしく動き廻ってはみるものの、出場が終れば跡形もない。白痴の語るお話だ。何やらわめきたててはいるものの、何の意味もありはしない。

という科白の中に象徴されている時間なのだ。彼にとって人生とは、このような時間が織りなす空しく騒々しい響きと怒り以上のものではない。このような時間から逃れる道は自殺しかありえなかった。彼はこのような時間の犠牲者であり、そのことによって旧南部の没落を身を以て示している人間である。

1928年4月6日と日付けのある第三章の視点はこの家の次男ジェイソンに置かれている。彼は白痴でもなければ、ノイローゼで自殺寸前の青年でもなく、きわめて正常な人間であるが、コンブソン家の理想とする人間像のいわば陰面にあたるような男である。彼の意識の流れや内的独白は前の二人に比べると著しく明晰であるが、冷酷な打算に裏付けられた自己中心主義が至る所に見られる。

被害者意識が彼の自己正当化の論理の前提となっている。クエンティンは土地まで売って大学に行かせてもらったのに、彼は州立大学にも行かせてもらえなかったことや、キャディの婚約者が約束していた銀行の職が、彼女の父無児の出産と離婚によって水の泡となったことを、重大な損失と見做して、これを埋合せることは、いかなる手段を用いても当然のことであると考えている。彼の意識の殆どを占めているのは現実の事柄であるが、過去の回想としてはこれらの損失にまつわるものが、いくつかある。たとえば、彼には財産と呼べるような物を何一つ残さずにアルコールで自らの死を早めた父の思い出とか、不義の女子を産んで離婚され、それによって彼の希望の象徴としてあった銀行の職を奪い、あまつさえその子の養育を彼らに託してしまったキャディへの呪詛で

ある。だから彼は、キャディが彼女の娘の養育費として月々送ってくる金を母親をだまして貯めていたのだ。しかも銀行に預けずに、現金にして自室の金庫の中にある。この日一日のジェイソンのシニカルで悪意に満ちた意識を辿ってゆくと、コンブソン家の没落の最終的局面が次第に明らかになる。「うちの血統は知事と將軍の血統だそうだが、と俺は言う。王様とか大統領とかの血統でなくて、まだしも幸いだった。」という独白の中に、この家の輝しい過去と無惨な現在との対比が、きわめてアイロニカルに表わされている。綿相場の変動を氣に掛けながら、母親のキャディに似て素行の悪い姪を尾行する時、彼の意識に浮ぶのは冷やかに素描された一家の没落の歴史である。

おれは通りまで出てみたが、二人の姿は見えなかった。おれは帽子もかぶらず、自分まで気遣いみたいな様子で、通りのまん中にいた。兄弟の一人が気遣いで、もう一人が水死して、もう一人が良人に放り出されて街をうろついているんだから残りの一人も気遣いなのは当たり前だと人々が考えるのも当然じゃないか。……

……クエンティンをハーヴァードへやるために土地を売ったり、おれ自身は野球の試合のとき二度見たきりのあの州立大学を維持するために年じゅう税金を払っていたり、屋敷内では自分の娘の名前を決して口にさせなかったりし、ついにはそれからしばらくすると、親父は町へさえ出ようとしなくなり、一日じゅう酒壺と一緒に坐っているだけで、おれは親父の寝巻きの裾とその素足を見ながら塙がかちんとなるのを聞くことができ、ついにはティー・ビーがそれを親父についてやらなければならなくなり——<sup>19)</sup>

彼のこの語り口は、彼が家に対する壮麗なイリュージョンを今となっては一切抱いてないことを明らかにしているだろう。ましてクエンティンがその喪失を嘆いて自殺した南部貴族の伝統的価値には一向に目もくれないのである。彼は作家自らが言っている新しい南部そのものである。<sup>20)</sup>そしてこのような彼の行動原理は損益計算にも似たものである。だから、彼は自ら意識しているように家の没落による被害者であると同時に、この没落そのものを身を以て体現している人物でもあるのだ。おそらくジェイソンのような人間はクエンティンならば最も嫌悪したであろうと思われる人間であろう。何故ならば彼はジェイソン型の人間が支配的な世界を恐れて自殺したのだからだ。人間的つながりを商取引きの契約の類いにまでおとしめてしまったこのジェイソンを通して、南部の旧い上品な地主階級の伝統が解体し、完全な物質主義的生活様式に席をゆずってしまった有様を見ることができるのだ。<sup>21)</sup>

最後の章の4月8日になると、ジェイソンが母とキャディを救いて貯えていた金を姪に持ち逃げされ、追跡するが、彼女も金も発見できず空しくジェファソ

ンに戻ってくる。この章はこれまでの三つの章とは一変して、客観的な多元描写が用いられ、この家の黒人の召使いの家族をもふくめて、コンブソン家の人々の言動が外側から、いわゆる作者の視点から描き出されている。それ故この最後の章は前の三章のそれぞれ異なる視点から語られてきたものに新たな照明を投げ掛け、それらを補完し、総合する。

三人の兄弟の章から受ける共通の印象は、非常に大切にしていたものが失なわれたというそれである。彼らのこの喪失感はキャディの墮落と深い関係がある。キャディの姿は、決して直接に読者の前に現われないが、作者が自らが言うように、きわめて意味深い存在である。作者はこの小説の成り立ちを次の様に説明しているが、ここには看過できないものがあるようだ。

それは、木に登って見るほどの勇気がない兄弟を尻目にして、その木に登って客間の窓をのぞきこんでいる女の子の泥だらけのブロースのイメージから始まった。そして私は、まずそれを彼女の兄弟の一人の口を借りて語らせようとしたが、それだけでは十分ではなかった。それが第一章であった。そのため、さらにもう一人の口から語らせることにしたが、それも十分ではなかった。これが第二章であった。……というのは、私にとってキャディは余りにも美しく、余りにもいじらしかったので、そのため彼女の口から、そこで行なわれていることを語らせることは到底できなかったのだ。そして、誰か他の人の目を通して彼女を見たならばもっと心を打つものになるだろうと私が考えたからであった。<sup>22)</sup>

また1955年の長野セミナーの席上、この作品についてフォークナーは、「私の心を強く揺り動かした一つの物語を語ろうと私は試みたのであるが、その度毎に私は失敗した」<sup>23)</sup>と言っているし、さらに別の機会には次のように言っている。

私はこの作品を五回とも別々に書いた。この物語を語ろうと試みたのは、書き上げるまでは私を悩まし続けるだろうと思われた夢から自分を解き放っためだった。それは二人の失なわれた女の悲劇であった。……この作品は出版後15年経ってはじめて完成された。というのはその時私は、それによって心の平静を求めようとして、この物語を心の底からすっかり語り尽してしまおうと、別の本につけるつけたしに最終的な努力を傾けたのだった。<sup>24)</sup>

フォークナーは自ら、この作品が「二人の失なわれた女の悲劇」であると述べているが、むしろ彼女たちを取り巻く三人の兄弟の悲劇と言った方が正しいのではないだろうか。何故ならば、彼らは、ある者は彼女を愛し、ある者は憎悪しながら、それぞれ彼女故に苦しみ続けているのであり、彼らの意識の中心

には常に彼女のあるイメージがあり、このイメージを通して彼らはそれぞれ、自分と外の現実世界との関係を規定されていると言っても過言ではないからだ。だから彼らの存在と彼らそれぞれが抱いている彼女のイメージとは不可分の関係にあるとも言える。また逆に彼らが持っているそれぞれ異なった彼女のイメージが、殆ど表面に姿を見せることがないキャディの姿を豊かに意味深いものにしているのではなからうか。キャディと彼女の兄弟との間のいわば一種の相互規定の関係は、ほかならぬ作家フォークナーの南部に対するアンビヴァレントな態度の反映、独断を恐れずに言うならばフォークナー南部に対する愛憎の入り混じった態度の対象化されたものではなからうか。

第四章における黒人の年老いた召使女ディルシーに「おらは始まりと終りを見ただ」と敢えて言わせたのは、作家自身のそのような態度に対して、意図的に一つの解決を試みるためではなかったろうか。もしそうだとすれば、「この物語を語ろうと試みたのは、書き上げるまでは私を悩まし続けるだろうと思われた夢から自分自身を解き放つためだった」と言う彼の説明は、十分に理解できるのである。

## 註

使用したテキストは、*The Sound and the Fury*, New York, The Modern Library, 1956. Reproduced photographically from a copy of the first printing

- 1) An Interview by J. Stein. *The Three Decades of Criticism* Hoffman & Vickery, (ed.) Michigan State Univ. Press, 1964. p. 83
- 2) *Absalom, Absalom!* Random House, New York, 1964. p. 378
- 3) SF, p. 1
- 4) *ibid.* p. 3
- 5) *ibid.* p. 21
- 6) *ibid.* p. 29
- 7) *ibid.* pp. 48—49
- 8) *ibid.* pp. 48—49
- 9) *ibid.* p. 5
- 10) *ibid.* p. 8
- 11) *ibid.* p. 73
- 12) *ibid.* p. 93
- 13) *ibid.* p. 129
- 14) *Absalom.* p. 12
- 15) Brooks, Cleanth, *William Faulkner : The Yoknapatawpha Country*, New Haven, Yale Univ. Press, 1963. p. 327
- 16) Vickery, O. W. *The Novels of William Faulkner* Baton Rouge, Louisiana State Univ. Press, 1964 p. 37

- 17) S. F. p. 185
- 18) Appendix Compson : 1699—1945, *The Sound and the Fury*, p. 411
- 19) S. F. p. 290
- 20) Cowley, Malcolm (ed.) *The Faulkner-Cowley File*, New York, Viking Press, 1966, p. 25
- 21) Chase, Richard. *The American Novels and its Tradition* Anchor, 1957. p. 221
- 22) Gwynn & Blonter, (ed.) *Faulkner in the University*, Charlottesville, Univ. of Virginia Press, 1959. p. 1
- 23) Jelliffe, Robert A. *Faulkner at Nagano*, Tokyo, 1956. p. 105
- 24) An Interview by J. Stein pp. 73—74